

石岡市長 谷島 洋司 殿

石岡市協働のまちづくり推進委員会
委員長 門向 啓子

協働のまちづくりの推進に係る提言について

第5期石岡市協働のまちづくり推進委員会では、「魅力の発見と創造～ボーダーレス地域社会の実現に向けて～」をテーマとし協議を進めてきました。そのなかで、令和6年度より市内全小中学校で導入された「コミュニティ・スクール」に注目しました。地域の魅力や特色を活かしながら、地域・学校・保護者など多種多様な人材・団体が枠を超えて、みんなで子どもたちを育てる仕組みである「コミュニティ・スクール」を良い方向へ進めることが、テーマの達成に繋がると考えました。

地域の人や先生、保護者が一緒に作る「みんなの学校」について、石岡未来会議とも協働しながら理想と課題について分析を行い、また、課題のある状況を理想に近づけるために「私たち市民ができること」「市民ができるためにあると良さそうな行政のサポート」「行政が動くことで、市民がやりやすくなること」について、協議を行い【別紙1】のとおりまとめました。

そのなかから特にご尽力いただきたい意見等について、石岡市協働のまちづくり条例第11条第2項に基づき、下記のとおり提言いたします。

地域の人や子ども、先生や保護者が一緒に作る「みんなの学校」＝「コミュニティ・スクール」が地域の学びと交流のハブとして進化し、やがて石岡市の地域の未来拠点の一つの役割を担っていくために、ご尽力くださいますようお願い申し上げます。

記

1. 地域と学校を繋ぐ要となっていく「コミュニティ・スクール」のコーディネイターへの支援をしていただきたい。

①コーディネイターを養成する講座を開催する。
②コーディネイターが孤立しないため、また、相互理解を深めるために、コーディネイター同士や学校関係者（先生やPTAなど）との交流の場を設定する。

2. 交流の場（地域に向けて開かれた学校）を創出するにあたり、子ども達も含めたみんなの学校となるため、開かれた場づくりのためのルール策定委員会を作っていただきたい。

①学校内に使われていない空き教室などを利活用し、コミュニティスペースなどの地域の人が集える場所をつ

くる。

②地域の人が学校行事に参加できる機会をつくる。

3. 市民が学校を「自分ごと」にするために、ボランティアをやり易くする仕組みづくりをしていただきたい。

①市内のボランティアに関する窓口を設置し、その職員と協働して働く特別職（ボランティアをコーディネイト等する人）を置き、行政との信頼関係を継続できるようにする。

②登録へのハードルを下げるため、学校支援応援団の登録用紙に「その他（できることはなんでも手伝うよ欄）」を入れる。

③市民がボランティアへエントリーするための総合窓口を構築する。（各課のボランティア登録の横ぐしをさす。）

④行政が募集しているボランティアは何があるのか全体がわかり、検索できるようにする。

⑤学校でのボランティアに参加するとポイントが得られ、子ども達との交流になるようにポイントに応じて学校での給食に参加できるようにする。

4. 「コミュニティ・スクール」に関して、参加した市民のやりがいや新しい参加者を増やすために、分かりやすく情報を発信・共有していただきたい。

①行政のSNSを利用し、コミュニティスクールに関する情報を発信する。

②記者の目を持つ市民を養成するため、記者講座やプレスリリース講座を開催する。

③市報に市民投稿欄をつくる。

5. 「コミュニティ・スクール」全体を支えるための財源を保障していただきたい。

①学校運営協議会にどのような予算科目や金額が必要なのか定期的にヒアリングし、コミュニティ・スクールに必要な予算をつける。（事務費・通信費など）

②各学校運営協議会に自由裁量で使える予算をつける。（補助金制度など）

③財源不足を補うために、他市町村での経費の収集・運営に関する好事例があれば、各学校運営協議会に共有する。

④コーディネイターの報償について、その性質上学校以外での活動にも支払われるような仕組みを作るために、実際に働いている稼働時間についてまずは把握する。

6. 学校がみんなの拠点になるために子どもたちに、差別や区別に対する教育をしていただきたい。

①障がい・異文化・LGBTQなどについて、親子が地域で知り合える対話を重視したイベントを開催する。

以上

【理想】

1 学校の開放性と居場所づくり

① 保護者や地域の人がいつでも自由に入り出しきれる

② 学校内や隣接した場所にカフェや相談スペースを設け、集える場所にする

③ 保護者や地域の人が授業に参加できる環境を整える(例:家庭科でのミシン指導など)

④ 地域の人が集まり、活動できる場の設置

【課題のある状況から理想に近づくためにできること】

市民ができること

行政が動くことで、市民がやりやすくなること

「市民ができること」のためにあると良さそうな行政のサポート

○卒業生や女性の力を借り、活動における役割分担の偏り(女性はお茶くみ等)をなくし、雰囲気をよくする

○うまいといった事例などを共有し、言いたいことを言え、やりたいことができる環境をつくる

○学校・地域に关心を持つためアンテナを高くする

○市民同士の誘い合い

○農体験などの実体験型の学習

○口コミで関心の輪を広げる

○学校からの情報に关心を持つ

○見守り・声かけ

○学校に対する保護者の困りごとを一旦受けとめてあげるコミュニティづくり

○地域へのアナウンス

○学校×地域ミニミーティングリアル

○校長先生とコーディネイターの交流会

○会長とコーディネイター市内交流会

○地域の人が参加できる機会をつくる

○コミュニティスペースなどの集える場所をつくる

○行政SNS利用

○協働活動に参加するハードルを下げる

○コーディネイターを含め、学校も行政も公に情報提供する

【課題】

・協働活動に対する抵抗感

・お互いに顔が見えにくい

●安心・安全の確保

・防犯対策

●人材不足

・地域にどんな人がいるか不明

・学校はどんな人を必要としているか不明

●活動活性化の難しさ

・活動の楽しさ等が他の人に伝わっていない

2 交流と学び合いの場

① 子どもも大人もお互いに学び合い、教え合う環境を大切にする

② 地域の人から学ぶ授業を検討する(例:米作りなどの地域の知恵を活かす)

③ 学校・地域の交流の場を設け、関わりを深める

④ 場設定の際は、各々の自主性にまかせ、活動への強制はしないようにする

⑤ 芸術・文化に全ての子ども達が触れられる機会をつくる

⑥ 目指すべきビジョン(どんな学校にしたいか、どんな子どもを育てたいかなど)を共有する場がある

- 校外で観察できること知る機会を
- 自分のできること見える化する
- 自分の住んでいる所の特徴を知る

- 行政と市民の信頼関係をつくる(窓口の職員を固定など)
- 消耗品のサポート
- 市民がエントリーできるサイト(窓口)を構築する。(市民エントリーのとりまとめ)
- 保険だけでなく、ささやかでもご褒美があるとよい。(例えば、10回参加でゴミ袋10枚がもらえるなど)
- 文化協会など市内各団体との交流
- ボランティア登録用紙に「その他」を入れる
- 後援・補助金
- 行事を通して学校に協力できる方を見つける

- コミュニケーション不足
 - ・情報共有不足
 - ・学校と地域間の連携不足
 - ・世代間のギャップ
 - ・目指すべきビジョン(育てたい子ども像等)の共有不足
 - ・地域にどんな人がいるか不明
 - ・リーダーシップをとれる人がいない
 - ・活動への関わり方などの周知不足
 - ・活動の楽しさ等が他の人に伝わっていない
 - ・評論家が多くて、プレイヤーがいない

3 安全・安心の確保と防災・防犯への協力

① 保護者、地域の人、学校全体で防犯や防災に協力し、安心できる環境を提供する

② 地域、保護者、学校が協力し合い、顔の見える関係性を築く

○地域美化

- 校内で活動するときのルールを明確化する
- 地域（地区）防災計画
- 学校と応援団のつなぐ人
- 「開かれた学校」を目指した仕組みづくり
- 学校と地域の密な関係を構築する
- 遊休施設の利活用
- 地域の人が参加できる機会をつくる

●コミュニケーション不足

- ・学校と地域間の連携不足

- ・お互いに顔が見えにくい

- ・多国籍化

●安心・安全の確保

- ・防犯対策

- ・個人情報の管理

- ・地域にどんな人がいるか不明

4 地域にとっても交流できる場である学校

① 学校と地域が一体となり、活動等を共有する場にする

② 困り感や理想の子ども像を地域全体で共有し、サポートし合う環境づくり

○評価成果が見えるようにする（コミュニティ・スクールの）

○学校からの情報に関心を持つ

○コーディネイターの組織化

○コーディネイターはどんな人がいいのか話し合う

○コーディネイター連絡協議会

○必要経費を創出するしくみ

○市民が喜ぶ市民講座開催

○社会福祉協議会との連携

○各地域の属性を明確にする→対策（地縁の有無、移住者、多少）

○「みんなの食堂（子ども食堂）」などでも学校が使えるようになる等の「開かれた学校」を目指した仕組みづくり

○コーディネイター継続支援、モチベーション維持

○子どもの理想の姿や学校の困りごとを見る化し共有

- ・学校と地域間の連携不足

- ・世代間のギャップ

- ・目指すべきビジョン（育てたい子ども像等）の共有不足

- ・地域にどんな人がいるか不明

- ・自分事化できていない

- ・活動への関わり方などの周知不足

- ・活動の楽しさ等が他の人に伝わっていない

5 すべての子どもたちが楽しめる学校

① 障害のある子もそうでない子も、毎日笑顔で通い、お互いに学び合える

② 学校が楽しい場所であり、心の拠り所となる

- 異文化理解を楽しめる場所をつくる
- 障害に対する理解を深める
- 協働活動を子ども・大人双方が楽しむ

- 差別や区別に対する子どもたちへの教育

- 子どもの理想の姿や学校の困りごとを見る化し共有
- コミュニティスペースなどの集える場所をつくる
- 後援・補助金
- 「開かれた学校」を目指した仕組みづくり
- 参加しやすい行事をつくる

- コミュニケーション不足
 - ・多国籍化
 - ・自分事化できていない
 - ・楽しくない
 - ・差別・区別
 - ・バリアフリーしていない？

6 世代を超えた参加と学び

① 年齢に関係なく、すべての世代が自由に参加し、学び合える場を提供

② 横のつながりを大切にし、思いやりと笑顔があふれる学校を目指す

- 移住者との関係性を築くためのバリアを取り除く
- 卒業生の活用（学校が門戸を広げる努力もするし、地域もする）
- 協働活動を子ども・大人双方が楽しむ
- 学校からの情報に关心を持つ

- 各行政が情報を共有し発してもらう

- コーディネイターを養成する
- 市民のコミュニケーションツールを作る

- ・学校と地域間の連携不足
- ・世代間のギャップ
- ・協働活動に対する抵抗感
- ・防犯対策
- ・活動の楽しさ等が他の人に伝わっていない